

資料館だより

第 46 号

平成 19 年 (2007)

3 月 31 日

編集・発行 市立歴史民俗資料館 〒208-0004 東京都武蔵村山市本町 5-21-1 TEL 042(560)6620
ホームページアドレス <http://www.city.musashimurayama.tokyo.jp/shiryoukan.html>

岸・神明入の谷戸田の風景



高島緑雄氏 撮影 (1966.1)

武蔵村山市の中世

市内には、「鍛冶ヶ谷戸」^{かじがやと}、「神明ヶ谷戸」^{しんめいがやと}、「後ヶ谷戸」^{うしろがやと}といった「～がやと」とつく地名が多く残されています。谷戸とは、湧き水や川の流に削られて形成された谷間や低い窪地のことで、このような谷戸は水に恵まれ水田に適した場所でした。

かつては市内の丘陵部では、上の写真のような谷戸田の風景をあちこちで見ることができました。

このような谷戸田は中世に拓かれたと考えられ、その生産力を背景に武士団が成長していったことがうかがえます。

比較的広い谷の出口に立地する後ヶ谷戸遺跡の

発掘調査では中世の集落跡の様子や、さらに科学分析結果からは中世初期にはすでに水田耕作が行われていた可能性が強いことがわかっています。

また、市内の出土・採集地点の明らかな板碑や中世陶磁器といった資料は、入りの阿弥陀が峯、眞福寺のある屋敷山周辺、中藤の字赤堀の谷、横田の字八幡下の谷などに多く集中している状況が明らかになっています。

そこで、今号の資料館だよりでは、特に板碑をはじめ、中世資料が多く残されている屋敷山周辺を取り上げ、市域の中世史を考えてみましょう。

中世の屋敷山を考える

武蔵村山市立歴史民俗資料館学芸員
堀部 由美子

「屋敷山」という地名

屋敷山とは、現在の市内中藤1丁目周辺、市立第三小学校周辺をさす字名です。

屋敷山には、奈良時代和銅三年（710）に行基によって開山されたと伝わっている眞福寺があります。その後、正応三年（1290）に龍性法師によって中興開山されました。

眞福寺では、市内最古の年号が刻まれた正應三年（1290）銘の板碑をはじめ、六基の板碑が確認されています。

また眞福寺に付属する堂山墓地では、寛正六年（1465）銘の月待供養の五輪塔（地輪）や貞和四年（1348）銘の板碑の他、現在不明のものも含めて、少なくとも十四基の板碑が確認されています。その中には墓の移転工事の際に土中より発見された板碑もあることから、ここには中世の墓域が形成されていたと考えられます。

また、第三小学校の南側から、明治時代初頭に大甕が出土したと伝えられています。この大甕はその形や胎土から中世の常滑（現在の愛知県知多半島）で15世紀代につくられたことが明らかになっており、「屋敷山遺跡出土中世常滑窯大甕」として、市の文化財に指定されています。

このような大甕が完全な形で見つかることは珍しく、近隣では、古代に国府がおかれた府中や、中世に江戸内湾（東京湾）有数の湊であった品川などで、同様の常滑の大甕が確認されています。

では、この「屋敷山」という地名はどのような歴史的背景のもとにつけられたのでしょうか？

古くから地元では、屋敷山出土と伝わる大甕は「前嶋様の水甕」などといわれ、屋敷山の地名は、江戸時代の旗本前嶋氏の屋敷跡（陣屋跡）があったことに由来すると考えられてきました。

しかし、この大甕の製作年代や正應三年銘の板碑をはじめ多くの板碑が眞福寺に残されている状況からは、前嶋氏の屋敷跡より古い居館跡がこの地に存在していた可能性を示唆するものといえます。



屋敷山周辺に残る中世資料 『武蔵村山市全図』（昭和49年）をもとに作成



屋敷山遺跡出土中世常滑窯大甕

屋敷山の周辺

さらに屋敷山周辺に眼をむけると、屋敷山の北側、入りの谷戸には近年まで谷戸田が広がり、その谷奥には赤坂池と番太池という溜池があります。

また、入り天満宮の北側の斜面では地下式坑と考えられる横穴があったとの話も残されています。

その他にも、屋敷山周辺では雑木林中に板碑が祀られている阿弥陀が峯や谷津地区で屋敷神として板碑が祀られているなどの興味深い事例が確認されています。

このように屋敷山の周辺には、生産基盤となる入りの谷戸田と谷奥の溜池、屋敷山の眞福寺、堂山の墓域が存在したと考えられ、中世の集落の姿を思い浮かべることができるのです。



中藤・入りの谷戸田の風景

屋敷山に残る中世

屋敷山周辺では本格的な中世遺跡の発掘調査は実施されておらず、本稿の内容も、板碑などの中世資料の分布状況や地名などから得られるデータをもとに組み立てた仮説に過ぎません。

当時の人々がどのように暮らしていたのかを知るには、本格的な発掘調査の実施や周辺地域の中世集落との比較研究など、今後の研究の進展を待たなくてはなりません。

しかし、昔ながらの地割りが残る屋敷山周辺を歩けば、古刹眞福寺や中世の墓域の面影を残す堂山墓地、谷奥の溜池などを実際に眼にすることができます。

普段何気なく通っている道や、耳にしたことのある地名、そんなところに歴史を知る手掛かりが隠されているのです。



眞福寺

なお本稿の執筆にあたり、平成18年度特別展「むらやまの中世」会期中に開催された歴史講座の内容に着想を得ました。講師である内野正氏には特別展の企画段階より、様々な御教示をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

<参考文献>

『武蔵村山市文化財資料集1 武蔵村山市の板碑』武蔵村山市教育委員会 (1981)

山田義高「伝・屋敷山出土の大甕」『資料館だより』第20号 武蔵村山市立歴史民俗資料館 (1994)

村山美春「武蔵村山における月待信仰と遺物について」『資料館だより』第21号 武蔵村山市立歴史民俗資料館 (1994)

高島緑雄「歴史と私」『月刊歴史手帖』第23巻第4号 名著出版 (1995)

『武蔵村山市史 通史編 上巻』武蔵村山市 (1999)

『武蔵村山市史 資料編 古代・中世』武蔵村山市 (1999)

『特別展解説書 むらやまの中世 - 市内に残る板碑と中世陶器 -』武蔵村山市立歴史民俗資料館 (2006)

寄贈資料（平成18年度）

	寄 贈 者 (敬称略、五十音順)	寄 贈 資 料 名	数 量
1	石 川 伊 三 郎	防空用ランプほか	全 6 点
2	内 野 昭	板碑ほか	全 2 点
3	内 野 定 年	高尾山杉苗寄附（複写）ほか	全 6 点
4	岸 浩	私家本「御神酒口」	全 1 点
5	木 村 猛	愛国婦人会旗（竿つき）	全 1 点
6	指 田 和 明	格子板戸着色絵（吉川緑峰筆）	各 2 枚
7	野 崎 富 生	白黒テレビほか	全 9 点
8	野 島 正 男	マゲモノほか	全 4 点
9	原 田 拓 夫	古文書・掛軸ほか	約 240 点
10	福 島 ユ キ	ジザイカギ	全 1 点
11	村 山 美 春	聯合軍司令部指令處理	全 1 点

平成19年度の主な事業（予定）

※ 実施時期等は変更となる場合があります（詳細は資料館HP、市報等でお知らせいたします）

	事 業 内 容	期 間	場 所
1	季節展「端午の節供」	4～5月	歴史民俗資料館
2	収蔵品展「ちょっと昔の暮らし －『武蔵村山の昔がたり』から－」	5～7月	歴史民俗資料館
3	季節展「七夕飾り」	7月	歴史民俗資料館
4	夏休み子ども展示「住まいの形－縄文時代の家、 古墳時代の家－」	7～9月	歴史民俗資料館
5	収蔵品展「里山の自然」（仮題）	9～10月	歴史民俗資料館
6	特別展「村山大島紬」（仮題）	10～12月	歴史民俗資料館
7	季節展「お正月飾り」	12～1月	歴史民俗資料館
8	季節展「桃の節供」	2～3月	歴史民俗資料館
9	歴史講座	6月予定	未 定
10	夏休み体験教室	8月予定	未 定
11	文化財見学会（「東京文化財ウィーク」関連事業）	11月予定	未 定